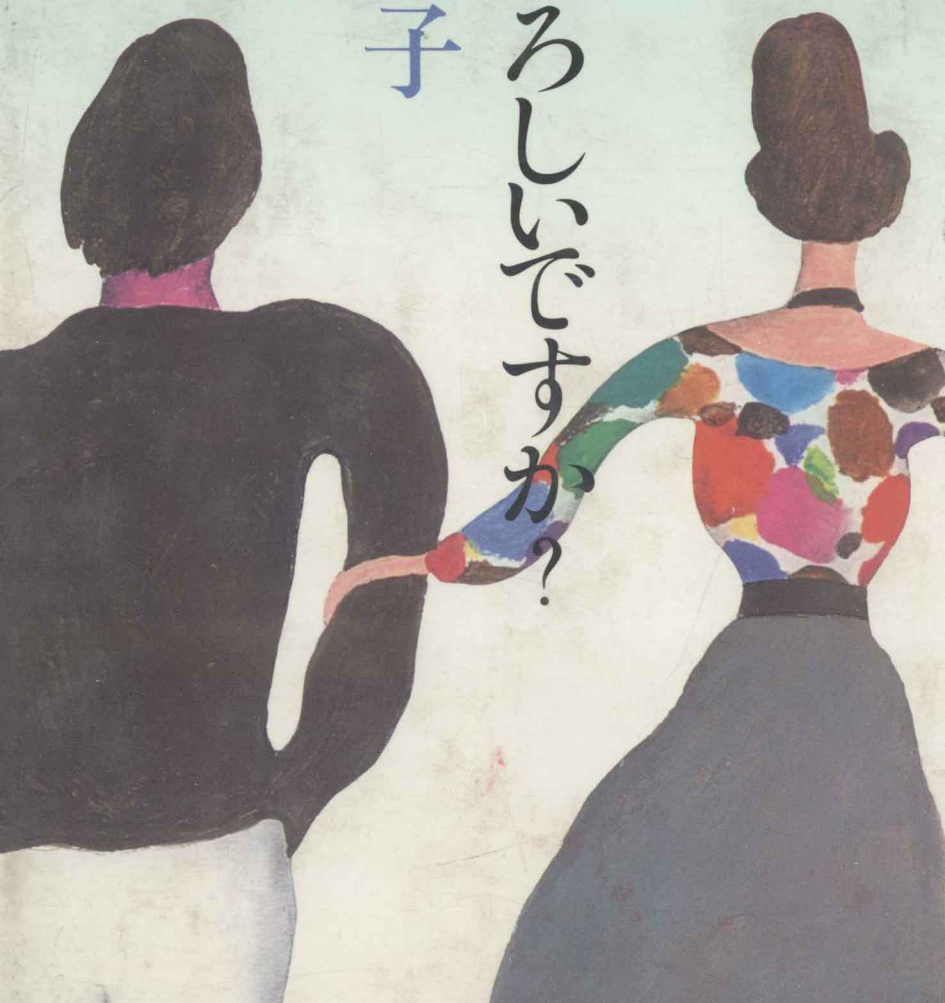
愛してよろしいですか？

田辺聖子



愛してよろしいですか？

田辺聖子

愛してよろしいですか？

一九七九年四月二五日　第一刷発行
一九八三年四月一〇日　第一四刷発行

定　価　七八〇円

著　者　田辺聖子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二二三八―二八四二
販売部（〇三）二二三〇―六一七一
印刷所　中央精版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1979 S. TANABE　　Printed in Japan

0093-772192-3041

目

次

私はローマへいった　7
私はウソをついた　41
少女は木の下　83
シチューの味は　127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

灯をともして　180
風の通りみち　239

装丁　灘本唯人

愛してよろしいですか？

私はローマへいった

1

ハイ・ミスというのはたいへん、生きにくい。
第一、どこを見てたらいいか、わからない。
やたらなとこを見ていて、偶然その先に男がいたりすると、その男はすぐさま、
（アッ、オレに気があるのか!?）
という顔をする。その男ばかりでなく周囲もそう思う。
全然、誰にも視線を合さないようにしていると、
（おたかくとまってる。だから貰い手もないのだ）
という。
愛想よくニコヤカにしようものなら、
（男狂いだ）
というし、キッとして顔を引き緊めれば、
（ヒステリーだ）
というのだ。

どないせえ、いうねん。
質素にしていると、
（色けがない。野暮。あんなオバハン、早よ辞めへんかなあ。会社へくる楽しみあれへん。オバハンは辞めさせて、ピチピチした若い子ォ、眼ェの正月するような美人をたくさん入れてほしいな）
などと男たちはうそぶきますね。
これが、キチンと身じまいし、いいものを着たりすると、
（怪しい。あのサラリーであの恰好できるやろか。パトロン居るの、ちゃうか）
などと無責任にいいあい、
（君ちゃうか、パトロンは）
（堪忍してェな。オレ、斉坂サンとどうこうさせられるほど、悪いことしてへん）
などとゲラゲラ笑い合うのです。
なにもこれは私の被害妄想ではなく、実際に昼休み、男たちがしゃべっているのを聞いたのだ。男たちは私がいないと思って野放図に、
（ハイ・ミスは深情けやで。気ィつけや）
などと冗談をいっていた。
斉坂サンというのは、私のことである。
斉坂すみれ、という名前を見た男は、みな一様にある期待を抱いて顔を輝やかせるようである。
しかし、現物の私が前に立つと、みな一様に失望の色を泛べるのである。男たちは「すみれ」という名前から、
「ピチピチした若い子、眼の正月をするような美人」
を勝手に想像していたらしいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でもそれは、男たちがわるいのであって、私の責任ではない。強いていうと、そんな名前を私につけた両親がわるいのだ。

私がうまれたのは、まだ戦争中のことだった。当時は軍国主義的な風潮で、何ごともおカタい時代だから、祖父は「すみれ」などという名前に反対したが、父はゆずらなかったそうだ。

父はひょっとすると（もう戦争はコリゴリだ）と思っているところだったのかもしれない。平和な時代がくるとは、誰も信じられないような頃だったから、せめて田舎でひっそりと戦争を避けて暮らしたいと思って、そんな願いを私の命名に籠めたのかもしれない。私たちは母の実家へ疎開していたのだった。広島の小さい村である。父は徴用されて大阪の軍需工場で働いていたということだ。

病身の父は、兵隊に取られるのだけはどうやら免れたけれど、私が中学生のときに死んでしまった。父は、「すみれ」が文字通り、年ごろになって美しく花ひらくのを見ずに死んだわけだけれども、また、その花が萎んで枯れてゆくのも見ずにすんだわけである。母みたいに口やかましく私と渡り合って、婚期のおくれた私のことであたまをいためる、そういうわずらわしさは経験しなくて幸わせだったといってもよい。

私は三十四、「オバハン」とかげでいわれているけれど、それは男たちが書類の上の年齢でしか、モノをみないからだ。私自身は、ハタチの頃からちっとも変っていないつもりなのに。

そういうことを考えたのは、ローマのスペイン広場の噴水のそばだ。私はいま、ローマにきてるのだ。そしてこの町をひとりで歩いて（今日はショッピング・デーで、団体の連中は目の色かえて買物に出かけていった。ついていかなかったのは、ハンドバッグにも靴にも服にも興味のない私と、退職教師のおじいさんだけ）何のわずらわしさもなく、男を見たり、たてものを見上げたり、する。

いや、イタリー男は女が一人で歩いているのを見ると、（オレに気があるのか）とかんぐって、へんな目で見たりせず、もっと直接行動をおこす。すぐ話しかけてくる。イタリー語というのは、片仮名

で書きとれるような、メリハリのチャンときいたコトバである。わからないから、
「ノー」
「ノー」
を連発しながら、ひとり歩きをたのしんだ。
「ノー」というと彼らは追ってこない。しかし目が合うと微笑して、
（いつでも行きまっせ）
という感じである。
そういう地元の人間はべつとして、観光場所はみな、アベックばかりであった。親子夫婦、友人夫婦らしいひとかたまり、そういうのが多い。ヒッピーさえも男と女のカップルばかりだった。
日本にいたら、そんな中に身を置いてると、まわりの思惑が気になって、私はおちつかなかったものだ。
うらやましがってる、と思われてるかもしれない。嫉妬してのぼせてる、中てられてキッキとしてる、と思われてやしないか、と、私は自意識過剰気味に、人目を気にし、人の気持を推しはかり、どこを見てたらいいのかわからない、ハイ・ミスは生きにくい、とつくづく思うのがオチなのだ。
しかしここはローマなのだ！
私は、人が何と思おうと知ったこっちゃなく、平気で、じろじろとまわりの男や女を見まわすことができるのだ。

2

まだ本格的な春は来ていないが、ローマの陽ざしは花ぐもりのうすら寒い日本より、ずっと強い。

こちらの方が、春は早いみたいだ。案内書や、絵葉書で見ると、ローマの観光名所であるこのスペイン広場の、西の階段は、ツツジに埋もれて花ざかりの景色になっているが、いまはまだ花はない。

唯一のいろどりは、階段の下、中央に花屋の屋台がある、それだけである。

ラッパ水仙、バラ、アマリリス、カーネーション、ミモザなどの花を売っている。そうしてどこにでもあるアイスクリーム屋が出ている。

空はまっ青である。百三十七段あるというゆるい勾配の石の階段は、腰をおろしている人でいっぱいで、段々も見えないほど。

春の観光シーズンになると、もっと人がふえるのだろうか。

尤も階段にのんびり腰をおろして日向ぼっこをしたり、おしゃべりをたのしんだりしているのは、ヒッピーとか、中どころの観光客で、アメリカの金持らしい団体客は、すてきな観光バスで乗りつけ、階段の下から写真をとって、また、スーッと行ってしまう。

そうでなければ、さっさと階段を上り、うしろのトリニタ・デ・モンテ教会を見て、またさっさと下りていく。若い団体客は、ソフトクリームを買ってそれをなめているところを互いに写真にとり合い、私は英語がわからないのだが、見ていると、

「『ローマの休日』ごっこしようよ」

といっているように思われる。

『ローマの休日』という映画は、最初、いつごろ見たのだったっけ……。ヘップバーンはともかく、グレゴリー・ペックみたいないい男が、現実でゴロゴロしているはずはないのだ。

そしてもしいるとしても、私の人生とはなんのかかわりもないに違いない。

私はわりに合理的で現実的だと思うのに、一面、ひどく夢みがちなところがあって、ヒョイと現実をとびこえてしまうところがある。

そのおかげで、私はごくくだらない恋愛を二、三べん経験した。
自分で勝手に相手をいろいろに思い描くのだ。私はちょっと好きになると、その男をグレゴリー・ペックのように思ったり、ジャン・ギャバンに見立てたりして、自分でその夢に酔うのであった。
相手のほうは、たいそう迷惑であろうと思われる。三十四になって心静かに思い返すと、よくわかるのだ。……
私は噴水のそばから腰をあげて、スペイン階段をのぼっていった。人だかりのしている階段の隅っこは似顔絵かきである。
ガラス絵を売っていたり、皮のベルト、袋物、針金細工を石の床に布を敷いて並べているのは、男か女かわからない風躰のヒッピーたちである。
私がゆっくり階段をのぼってゆくと、左手の隅で皮ベルトをひろげているヒッピーがいた。彼は灰色のパンのかたまりを食べている。
一組の青年と娘が、腰に手をまわして体をくっつけ、皮ベルトを見ていた。
娘は亜麻色の髪で、ほっそりと美しい十七、八の子である。イタリー語で何かいい、皮ベルトを指した。青年も口を出した。
ヒッピーはパンを食べるのに夢中なのか、売る気もないのか、返事しない。
女の子は肩をすくめて青年に笑い、青年は何かしゃべりつつ、むつまじそうに二人で寄り添って階段を上っていった。
何となく、その青年は、日本人のような気がする。よく日やけして背がたかく、漆黒の髪で、横顔しか見なかったが、彼は首に、唐草模様のうこん木綿のネッカチーフをしていたのだ。
よく考えてみると、あれは日本のフロシキではあるまいか。
私は上まで階段を上らず、中ほどで坐った。

早春のローマにはまだ日本人の団体は多くなかった。レオナルド・ダ・ヴィンチ空港と呼ばれるローマの空港で一組、バチカンで一組会っただけ。だから一人で町をうろうろしている日本人旅行者に会うことは珍らしい。

スペイン階段にしばらく坐っているうちに私は退屈してきた。上ってくるのは太っちょの年とった観光客の男女ばかりだし、べつに眺めもかくべつよいところではなく、車の往来はげしい町なかである。

なぜ、こんなところでうっとりと坐って考えごとしているかというと、もしかしてここにいれば『ローマの休日』ごっこではないが、何かドラマティックなことがおこる、と、無意識に考えてるせいではないだろうか。

スカートを払って立ち上って、まわりを見まわしていたら、さっきの青年が一人で階段の上から下りてきた。やはり日本人だ。

日本人は、どことなくわかるものである。

どんな容貌の人でも、その顔立に日本人風な表情があぶり出しになっている。中国人やベトナム人とまちがうことは決してない。

「こんちは」

と青年は私にいって、笑った。

だいたい日本人同士、外国で会って挨拶するようなことはあんまりない。互いに見て見ぬふりをするのが大かたなのだ。そばへ近付いても、わざと気付かぬふうをしたりする。

青年が首にまいているのは、やはりうこん木綿のフロシキである。

「こんにちは」

と私もいった。

「たいへんな人ですね。こんな、何の変哲もないところに」
と青年は私の思ってるのと同じことをいった。
「なんでこう、人が集まるんでしょう」
と私は青年の舌軽な調子につられて、そういいながら一緒に下りた。
「なんで人が集まるか、というと、人が集まってるから、集まるんでしょう」
青年はすましていう。アクセントは関西風である。私はローマのどまんなか、ひとりでいるときに関西弁をきいたのが嬉しくなって、
「ハハハハ……」
とお愛想わらいをした。
さっきの皮ベルト屋のとなりに、針金細工を地面に拡げているヒッピーがいるが、これも商売気がないのか、客が寄っても平気で居ねむりしている。正午をまわって、気持のいい日だまりなのである。
「ヒッピーって、どうして針金を売るんでしょう。大阪でもそうよ。何か、ワケがあるんですかしらね」
と私はいった。
「さあ。べつにワケなんかないんでしょう。簡単だからでしょう。金がないからとちがいますか。有り金を無くして、針金を売る、ってとこかな。アハハハ」
「ハハハハ」
とこれは、お愛想わらいでなく、私は本当におかしくて笑ったのだ。
青年の口調は爽やかで、コトバは歯切れよい。私がふり向いたので、
「お連れを待ってる?」
と彼は聞いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com